

木 塚 遺 跡

—第5次調査—

久留米市善導寺町木塚所在遺跡の発掘調査報告
久留米市文化財調査報告書 第158集

1999.10

久留米市教育委員会

序

水と緑に恵まれた自然豊かな久留米市は、古くから筑後地方の交通・経済・文化の中心として繁栄してきました。その繁栄を示すかのように、市内各地には多くの重要な文化財が存在しています。

ここに報告しますのは、民間の宅地分譲造成工事に伴って事前に実施した、木塚遺跡第5次調査の発掘調査記録であります。当教育委員会では、開発によって破壊・消滅する埋蔵文化財に対し、事前に発掘調査を実施し、記録保存を通して郷土の文化財の周知・啓発に努めています。

今回の発掘調査では、平安時代～鎌倉時代にかけての屋敷地の一角、近世の木塚集落に展開した生活痕跡が確認され、当地域の歴史解明に、新たな知見を得ることができました。本書が、地域の歴史解明・学校教育の資料として、更には文化財愛護思想の理解・普及、学術研究の一資料として、多少なりとも活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大のご理解のもとにご協力いただきました久留米市農業協同組合・平山不動産有限会社をはじめ、関係各位に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成11年10月31日

久留米市教育委員会
教育長 桑野善吾

例言

1. 本書は、宅地分譲に伴う造成工事に先立って久留米市教育委員会が受託事業として、平成11年度に発掘調査を実施した、久留米市善導寺町木塚字北屋敷1478-5所在の木塚遺跡第5次調査の記録である。
2. 発掘調査は、久留米市教育委員会が主体となり、教育文化部文化財保護課の神保公久が行った。
3. 本書に掲載した実測図の作成、図面の浄書は神保・小澤知美・米澤美詠子が行った。
4. 遺構写真、及び遺物の写真撮影は神保が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図の方位は磁北を示す。また、遺構の略記号はSD一溝、SK一土抗、SP一ピットを示す。
6. 本書に掲載した遺物及び調査に関わる記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管され、今後活用される予定である。
7. 本書の執筆・編集は神保が行った。

本文目次

I はじめに	1
II 位置と環境	2
III 調査の記録	4
IV ま と め	12

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本書は、久留米市農業共同組合による宅地分譲造成工事に伴う事前の緊急発掘調査である。平成5年9月16日に、久留米市農業共同組合から、久留米市善導寺町木塚字北屋敷1478-5における埋蔵文化財包蔵有無の事前審査依頼書が提出された。依頼書提出当初は、当該地における開発内容は決定していなかったが、当該地一帯は、福岡県遺跡台帳に遺跡番号030185として記載のある木塚遺跡の範囲に含まれ、平成5年10月8日、確認調査を行ったところ、現地表から約1mで中世の井戸を確認したため、開発内容次第では発掘調査が必要である旨を回答していた。

その後、平成11年度になって開発内容が宅地分譲と決定し、協議したところ、宅地分譲地の道路部分を発掘調査し、宅地部分については盛土による保存調整を行うこと、調査費用は原因者で負担することで合意した。平成11年6月9日に発掘調査の依頼書が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成11年6月30日に開発主体である平山不動産有限会社と久留米市長白石勝洋は、「木塚遺跡第5次調査発掘調査委託書」を取り交わした。

2. 調査の組織

調査委託：平山不動産有限会社

調査主体：久留米市教育委員会

調査総括：教育文化部

文化財保護課

教育長 桑野 善吾

部長 坂田 博春

課長 古賀 幸男

事務主査(統括) 松村 一良

庶務担当 榎藤 節子

整理担当 小澤 知美 米澤 美詠子

課長補佐兼主査 萩原 裕房

事務主査 富永 直樹

調査担当 神保 公久

発掘調査臨時職員

岩見明美 大石マサ子 大塚チズ子 田中カオル 田中樹子 田中レイコ 財木美智子 高尾春代

橋原初美 半田純香 廣田英子 藤木幸子 保坂冴子 丸山 幸 森光えみ子 森光陽子 渡辺しげ子

渡邊やつ子

発掘調査整理臨時職員

勝田由美 宮原美由紀

3. 調査の方法

発掘調査は、宅地造成地の道路予定地部分約300㎡を対象とした。重機によって表土の除去を開始したが、対象地は旧農業共同組合の倉庫が建設されていた部分で、コンクリート製の基礎がそのまま確認された。また、旧農業共同組合の建物を解体した際の廃材等を廃棄しており、その為、遺構面は擾乱が多く、遺構の残存状況は極めて悪かった。表土の除去後、遺構検出を開始し、終了した箇所より平板測量図(S=1/100)を作成した。遺構の掘り下げ終了後、必要に応じて写真撮影・個別実測を行い、全ての遺構の掘り下げが終了した後、調査区内の清掃を行い、全体写真を撮影した。遺構の実測及びエレベーションは、トータル・ステーションによって行い、その記録は遺跡調査凡用システム「カタタ3DC」に記録・保存されている。また、遺構写真はカラーリバーサル35mm、モノクロ35mm・6×7により撮影した。

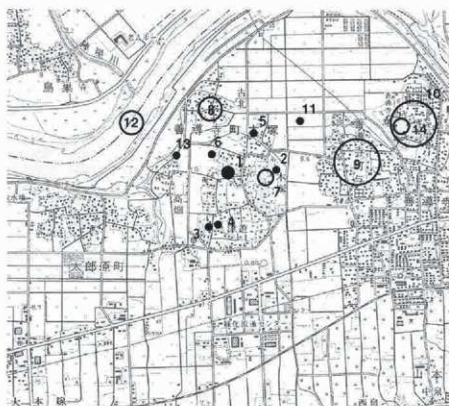
Ⅱ. 位置と環境

木塚遺跡は久留米市街から東へ約8kmに位置する。遺跡の北側には、阿蘇外輪山に源を発し、大分県側から筑後川が蛇行しながら西流している。この筑後川は幾度となく氾濫を繰り返し、大量の土砂を上流から下流へと運ぶ。その結果、筑後川の両岸には多くの自然堤防が形成されている。遺跡の立地する木塚周辺には勿体島・古北・太郎原・野口などの自然堤防がある。これらの自然堤防上には、多くの遺跡が所在しており、木塚の自然堤防にも過去の調査によって縄文時代前期・晩期以降、弥生時代、古墳時代・歴史時代の遺構・遺物が確認されている。

木塚台地の東側端部の眺望の良い最高所に築かれた木塚古墳は、過去2回の調査が行われ、全長約48m、後円部半径約15.5mの前方部がやや短い前方後円墳であることが確認されている。内部主体は初期の横穴式石室で、周辺からは円筒埴輪、家・甲冑・馬・鞍など形象埴輪、壺・器台・埴形などの初期須恵器、白玉などが出土している。出土遺物・内部主体の形態から、5世紀後半の築造と考えられている。また、木塚古墳の調査に伴い、弥生時代前半の土城墓2基、木棺墓2基、石棺墓6基が検出されている。特に土城墓には、板付Ⅱ式の小壺が副葬されており、弥生時代前期の葬送儀礼を考える上で貴重な資料である。



第1図 調査区から耳納連山をのぞむ



第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

遺 跡 名

1. 木塚遺跡第5次調査
2. 木塚古墳
3. 木塚遺跡第3次調査
4. 木塚遺跡第4次調査
5. 北島遺跡
6. 堂前古墳
7. 本村古墳群
8. 古北遺跡
9. 与田遺跡
10. 善導寺遺跡
11. 与田土器園遺跡
12. 古北川底遺跡
13. 宇羅遺跡
14. 善導寺

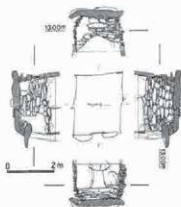


第3図 木塚遺跡第5次調査区位置図 (1/2,500)

一方、木塚台地の東側約1.2kmには大本山善導寺が所在する。善導寺は、1208年に創建されたと伝えられるが、周辺には字名が「カワラケソノ」・「大屋敷」・「中屋敷」などの地名が残り、中・近世に営まれた屋敷地が周辺に展開したことが推測される。木塚台地にも今回の調査地である字「北屋敷」・「中屋敷」・「堂前」などの字名が残る。過去4次に及ぶ調査では、土坑など中世の屋敷地に関するような遺構が検出されており、平成9年度の立会調査では、初期高麗青磁などが出土している。大規模な古代～中世集落が存在したことが予想される。当地周辺は、開発の波が及んでいない地域であり、今後の調査によって明瞭な形で中・近世の屋敷地・集落跡が検出されるものと思われる。このように、木塚台地には、縄文時代から近世に及ぶ遺跡が展開しており、台地全体が複合遺跡と言うことができよう。

〈参考文献〉

- | | |
|---------------------------------------|-------|
| 久留米市史編さん委員会「木塚遺跡」『久留米市史』第12巻〈資料編「考古」〉 | 1994年 |
| 久留米市史編さん委員会「木塚古墳」『久留米市史』第12巻〈資料編「考古」〉 | 1994年 |
| 久留米市教育委員会「木塚遺跡」久留米市文化財調査報告書第14集 | 1977年 |



第4図 木塚古墳石室実測図 (S=1/160)



第5図 木塚古墳石室現況

Ⅲ. 調査の記録

1. 発掘調査の記録

発掘調査は平成11年7月5日、重機で表土を除去することから始まった。調査対象地は約1,000㎡と広いが、調査前に行った協議の結果、宅地の中心を通る道路部分についてのみ調査を行うことであったので、宅地造成部分の中心地に幅6.0m、長さ43mの調査区を設けた。遺構面までは概して深く、現表土から約1.0mを測る。付近の古老によると、付近一帯は、特に調査区の北側にかけて、昭和初期頃に大規模な土取を行っており、その作業に動員されたと言う。その為、遺構の残りが悪いことが予想された。表土除去の結果、調査区の北側は現代の建物の基礎が残存しており、南側付近にも廃棄用の大穴が開けられるなど擾乱も多く、遺構の残存状況は予想通り悪かった。又、調査区の東側壁沿いには近世の溝が約33mにわたって検出されたが、完掘には至っていない。調査は、平成11年7月21日に終了した。



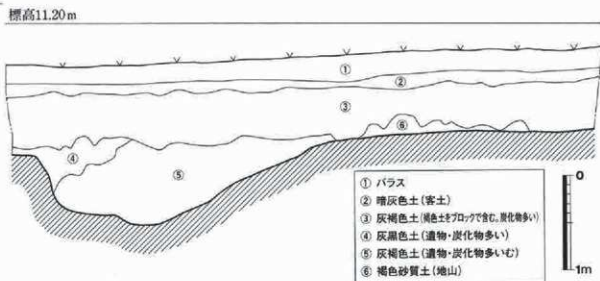
第6図 表土剥ぎ状況（北から）

2. 検出遺構と遺物

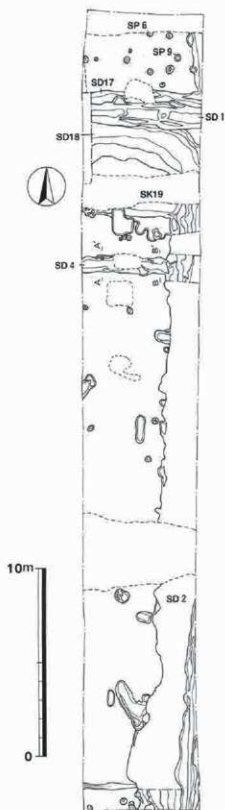
a. 調査区の土層（第7・8図） 遺構面までは、現表土から約80～100cmで達する。遺構面はほぼ平坦である。土層は、現地表のバラス層が約20cm、その下に客土が約10～15cm、そして炭化物・褐色の地山ブロックを粒状に含む灰褐色砂質土が見られる。その直下は褐色砂質土の地山であるが、遺物の包含層や地山の前位層が見られないことから、削平を受けているものと思われる。



第7図 南壁土層（北から）



第8図 南壁土層（S-1/40）



第9図 木塚遺跡第5次調査遺構配置図 (S=1/200) ・調査区全景 (南上空から)

b. 検出遺構

溝

SD1 (第10図)

調査区の北側、後述するSD17・18、SK19と重複して検出された近世以降の溝である。東西方向に走る溝で、西側に若干の傾きを持つ。長さは不明である。幅は約1.0mで一定している。深さは最大0.4mである。SD17・18に後出する為、SD17・18の遺物を多く含んでいた。下面まで掘り下げた段階で水が湧き出し、常時水が溜まった状態であった。恐らく排水用の溝と思われる。



第10図 SD1全景 (西から)

SD2

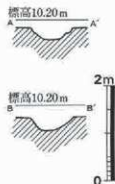
調査区の東壁沿いで検出した近世の溝である。この溝は、調査区の南壁から検出し、東壁沿いに約33m続き、SK19、SD1・17・18と重複する部分で西側へ直角に折れる。幅は南壁沿いで3.0m (第9図) であり、深さは0.9mである。埋土は灰黒色砂質土であり、大量の近世陶磁器を含んでいた。出土遺物から、幕末～明治時代の所産と思われる。

SD4 (第11・12図)

調査区の中心より北側、SK19より約2m南側で検出した、東西方向の溝である。幅は約0.8mであるが長さは不明である。深さは現存0.6mである。溝の断面は底面が概ねフラットで、壁は直に立ち上がる。埋土からは土師器の坏・小皿の小片が出土している。



第11図 SD4全景 (東から)



第12図 SD4断面図 (S=1/80)

SD17

調査区北側の前述したSD1・2、後述するSD18、SK19と重複して検出された溝である。SD2との切り合い関係は不明であるが、SD1に切られ、SD18を切っている。幅は不明であるが、深さは最大で約0.7mを程度であろう。埋土は黒褐色土である。

SD18 (第13図)

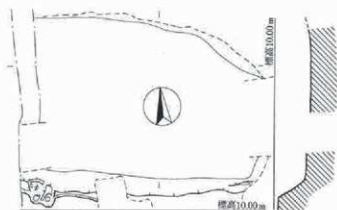
前述したSD1・17に切られる形で検出したものである。調査区を東西に横切る溝であり、その長さは不明である。幅3.9m、深さは最大で約0.8mを測る。埋土は黄灰色土であり、近世陶磁器やSK19の遺物を少量含んでいた。調査区幅の約6mのみの調査であるので、その機能については不明である。



第13図 SD18全景 (東から)

土坑

SK19 (第14・15図)



第14図 SK19実測図 (1/80)



第15図 SK19全景 (西から)

埋土黒色砂質土であり、他の遺構とは明確に区別できた。旧農協倉庫の基礎による破壊と西側が調査区外である為、全容は不明であるが、検出した規模は東西約5.2m、南北約3.8mの隅丸長方形プランを呈する。深さは削平されているものの最深部0.6mである。底面は多少凹凸があるがほぼフラットであり、遺構の壁付近から急に立ち上がるものと思われる。埋土からはヘラ切り底の皿・坏、黒色土器A・B類、白磁碗Ⅳ類、赤色顔料を入れたと思われる坏など、豊富な遺物が出土している。出土遺物から11世紀後半～12世紀前半の年代が考えられる。

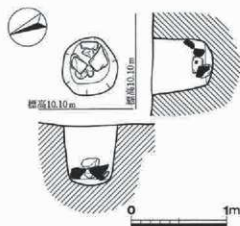
ビット

SP9 (第16・17図)

前述したSD1・2・17・18、SK19の北側で検出したビットである。直径0.3m、深さ0.35mを測り、底面からは片岩などの礫が7個検出された。恐らく掘立柱建物の根石として利用されたものであろう。埋土からは土師器の坏・皿などの細片が出土している。



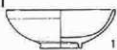
第16図 SP9全景 (西から)



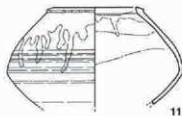
第17図 SP9実測図 (S=1/20)

c. 出土遺物 (第18図)

SD 1



SD 2



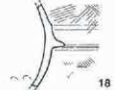
SP 6



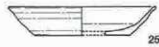
SD18



SD 4



SK19



表採資料

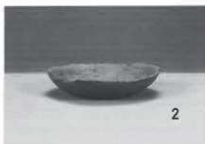


第18図 出土遺物実測図 (S-1/4)

写真図版 1



SD1出土遺物



SD2出土遺物



SD2出土遺物



SD2出土遺物



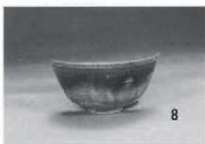
SD2出土遺物



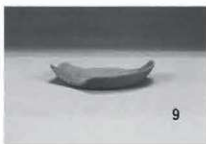
SD2出土遺物



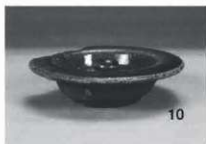
SD2出土遺物



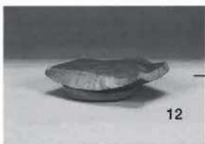
SD2出土遺物



SD2出土遺物



SD2出土遺物



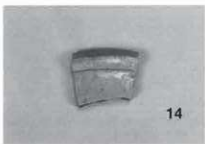
SD2出土遺物



SD2出土遺物



SD2出土遺物



SD2出土遺物



SD2出土遺物

写真図版 2



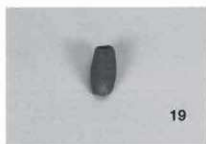
SD2出土遺物



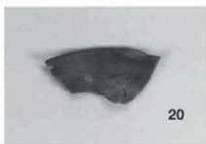
SD2出土遺物



SD2出土遺物



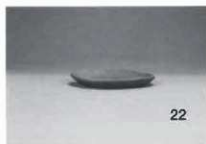
SD4出土遺物



SP6出土遺物



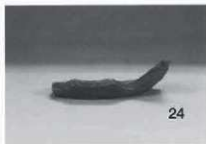
SD18出土遺物



SK19出土遺物



SK19出土遺物



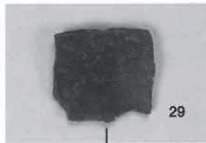
SK19出土遺物



SK19出土遺物



SK19出土遺物



表採資料

第1表 遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量			色調		調整		胎土	構成	備考	登録番号		
				口径(内)	底径(内)	高さ(厚)	外面	内面	外面	内面						
1	SD 1	陶器	皿	(11.4)	4.4	4.2	透明釉	透明釉			精	良	良好	内・外面に貫入 18世紀初頭	19909 00001	
2	SD 2	土師器	小皿	(8.2)	4.0	1.7	橙	橙	ナ	デ	ナ	精良・金雲母 赤色粒子	良好	底部半切り・門歯痕	19909 00002	
3	SD 2	陶器	皿	(14.4)	4.6	2.8	透明釉	透明釉				少量の砂粒含む	良好	内・外面に貫入 砂目跡・17世紀前半	19909 00003	
4	SD 2	土師器	杯			(2.2)	黄橙	黄橙	ナ	デ	ナ	精良・金雲母 赤色粒子	良好	内面からの穿孔	19909 00004	
5	SD 2	青磁	皿			(1.3)	淡青緑	淡青緑				精	良	良好	19909 00005	
6	SD 2	陶器	碗	(8.9)	(3.1)	5.1	灰釉	灰釉				精	良	良好	内・外面に貫入	19909 00007
7	SD 2	染付	碗	(7.6)	(3.5)	5.1	透明釉	透明釉				精	良	良好		19909 00008
8	SD 2	陶器	碗	(8.5)	(3.1)	4.5	緑釉	緑釉				精	良	良好	内・外面に貫入	19909 00009
9	SD 2	土師器	小皿	(5.9)	(4.5)	1.3	黄橙	橙	ナ	デ	ナ	石炭・金雲母 多く含む	良好	底部半切り		19909 00010
10	SD 2	陶器	蓋	8.4	3.9	2.3	褐釉	赤褐			糸切り	精	良	良好		19909 00011
11	SD 2	陶器	土瓶	(8.7)		(10.3)	灰釉	赤褐				精	良	良好	外面煤付着	19909 00006
12	SD 2	青磁	碗		4.9	(2.2)	オリーブ	オリーブ				精	良	良好	同安窯	19909 00012
13	SD 2	染付	碗			(2.9)	透明釉	透明釉				精	良	良好	明染	19909 00014
14	SD 2	白磁	碗			(2.6)	乳白	乳白				精	良	良好	Ⅳ類	19909 00015
15	SD 2	土師器	杯		4.5	(2.6)	橙	橙	回転ナ 水引き			精良・金雲母 赤色粒子	良好			19909 00016
16	SD 2	染付	皿	(22.2)	(14.0)	3.0	透明釉	透明釉				精	良	良好	唐草文	19909 00013
17	SD 2	瓦葺土器	羽釜			(9.0)	反オリーブ	反オリーブ	ハケ目 ナ	ナ	ナ	小礫・石炭 含む細砂粒	良好			19909 00019
18	SD 2	染付	皿	(10.0)	(4.9)	3.9	灰白	灰白				精	良	良好	明内・外面に貫入	19909 00018
19	SD 4	土製品	土睡	(2.8)	最大1.5	北60.5	赤	褐	赤	ナ	デ	精	良	良好		19909 00017
20	SP 6	土師器	杯	(16.0)		(2.8)	黄褐	黄褐	ナ	デ	ナ	精良・金雲母 赤色粒子	良好	内面からの穿孔		19909 00020
21	SD18	土師器	杯			(1.5)	橙	橙	ナ	デ	ナ	精良・金雲母 赤色粒子	良好	底部へラ切り 赤色釉料多量に付着		19909 00021
22	SK19	土師器	皿	9.1	7.2	1.2	黄橙	黄橙	回転ナ ナ	ナ	ナ	精良・金雲母 赤色粒子	良好	底部へラ切り		19909 00022
23	SK19	土師器	皿	9.7	7.2	1.6	橙	橙	回転ナ ナ	ナ	ナ	精良・金雲母・長石 赤色粒子	良好	底部へラ切り		19909 00023
24	SK19	土師器	皿	(10.6)	(8.2)	1.6	灰褐	灰褐	回転ナ ナ	ナ	ナ	精良・金雲母・長石 赤色粒子	良好	底部へラ切り		19909 00024
25	SK19	土師器	杯	(15.6)	(10.0)	3.0	黄橙	黄橙	回転ナ ナ	ナ	ナ	精良・金雲母 赤色粒子	良好	底部へラ切り		19909 00025
26	SK19	黒色土器	埴			(3.7)	黒	黒	腰ハケ ミガキ			精	良	良好	黒色B類	19909 00027
27	SK19	黒色土器	埴	(16.0)		(4.8)	黄 黄	黒	ミガキ ミガキ			精	良	良好	黒色A類	19909 00026
28	SK19	土師器	埴	(8.6)		(7.6)	橙	黄橙	ナ ナ	デ デ	ナ	小礫・石炭 長石多く含む	良好			19909 00029
29	瓦葺土器	土睡				(5.2)	灰黒	灰黒	ナ	デ	ハケ目	石炭・角閃石・長石	良			19909 00028

IV. ま と め

今回の調査は、宅地分譲造成工事に先立つ事前の発掘調査であるが、宅地分譲予定地の道路部分のみの調査となった。調査面積は約300㎡であったが、削平・攪乱の為、検出遺構は少なく、よって出土遺物もパンコンテナー2箱と少ない。ここでは、今回得られた資料と過去に行われた調査の成果を合わせて、木塚遺跡の概要をまとめることにする。

今回の調査地は、木塚台地の北西端部付近にあたる。調査地のすぐ西・北側には浅い谷が入り、1m以上の高低差を測る。木塚台地は南北0.7km、東西0.5kmの楕円形を呈する台地であるが、台地の東側には古代条里制の基準となったと言われる大谷川が、南の耳納山地側から流れ、台地の北側を廻るように西側へ流れを変える。大谷川の流域では水田が営まれ、台地上では畑作が行われている。遺跡は台地上に営まれ、木塚台地の周辺の自然堤防上にも古北遺跡、北島遺跡、与田土器園遺跡などが点在している。

木塚遺跡は、今回で5次調査となったが、第1・2次調査の木塚古墳をはじめとして、縄文時代・弥生時代・古墳時代・歴史時代・近世の遺構・遺物が確認されている。次に各時代の概要を記す。

縄文時代 木塚古墳調査時にその廃土中に前期の縄文・曾根式土器、晩期の縄文土器、黒曜石製石鏃・サヌカイト製の石器類を多量に検出している。しかしながら当該期の遺構は未発見であり、今後の調査での発見が期待される。また、今回の第5次調査では、縄文時代の遺物は全く出土していない。

弥生時代 弥生時代の遺構は、木塚古墳調査時にその下層から発見された。検出遺構は石棺墓6基・木棺墓2基・土壊墓2基である。石棺墓は全てが完掘していないが、1号石棺墓は小口部分にしか石が用いられていない。特に注目されているのは1号土壊墓である。1号土壊墓は約1.7×1.4mの長方形を呈するものであるが、埋土の上部付近から3個の小型壺形土器が出土している。副葬品として用いられたものと思われる、弥生時代前期の葬送儀礼を考える上で貴重な資料である。今回の第5次調査では、弥生時代の遺構・遺物ともに検出していない。

古墳時代 木塚台地上には、前方後円墳の木塚古墳をはじめ、木村1～4号墳・堂前古墳などが築造されている。しかし現在では、木塚古墳の横穴式石室が辛うじて現存する他は全て破壊されており、木塚台地上に展開した古墳群を目の当たりにすることはできない。今回の第5次調査では、11世紀後半のSK19の底面から、小型丸底壺が1点ほぼ完形で出土した。SK19が掘削された時に混入したものであろうが、今回の調査地点周辺に古墳時代の遺構が存在する可能性が考えられる資料である。

歴史時代 木塚古墳調査時に中世の土坑・穴蔵・大溝を検出している。内部からは土師器や輸入陶磁器など豊富な遺物が出土している。また、平成9年度の試掘調査では、高麗青磁皿も出土しており、大規模な集落または屋敷地が存在するものと思われる。今回の調査では、SD4・SK19・SP9などが主な遺構としてあげられるが、今回の調査区を平成5年に試掘した際には、井戸を1基検出しており、木塚台地の北西端にあたる調査区付近に、中世の屋敷地が存在しているものと思われる。周辺が大規模な開発が及んでいない地域であることを勘案すると、今回のようなトレンチ状の調査ではなく、面的な発掘調査を行えば、



第19図 調査区から筑後川上流方向をのぞむ

中世の屋敷地を検出できる可能性は非常に高いものと思われる。

近世～近代 今回の調査では、SD1・2・17・18と近世～近代の溝を検出した。SD2は調査区東壁沿いに南から西側へ折れ、排水機能と同時に区画の溝として利用されていたものと思われる。他の3条の溝も調査区外ではSD2同様に南側へ折れていることも考えられ、同じ機能を果たした溝が踏襲されて、掘り直された可能性も考えられよう。

以上、今回の調査結果を交えて木塚遺跡の概要を述べてきたが、いずれの時代を見ても注目に値するものであり、久留米東部地域の代表的な遺跡と言うことができる。今後の調査によって更に、その重要性が認識されるものと思われる。

遺物観察表凡例

1. 口径・底径・器高の数値の単位はcmである。また、()内の数値は現存または復元値を示す。
2. 陶磁器の色調は軸色を示す。
3. 登録番号は、久留米市教育委員会文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。
4. 陶磁器の分類は横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一形式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集4』1978年に拠った。

報 告 書 抄 録

ふりがな	きづかいせき だい5じちようさ							
書 名	木 塚 遺 跡 第 5 次 調 査							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第158集							
編著者名	神保 公久							
編集機関	久留米市教育委員会							
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 ☎0942-30-9225							
発行年月日	1999(平成11)年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
	市町村	遺跡番号					m ²	
木塚遺跡 第5次調査	福岡県久留米市 善導寺町	40203	030185	33°19'26"	130°35'41"	1999年7月 5日 ～7月21日	300m ²	宅地造成に伴う 事前調査
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
木塚遺跡 第5次調査	集 落 跡	平 安 時 代 鎌 倉 時 代 江 戸 時 代		土坑1基 溝1条 溝3条		土師器・須恵器 輸入陶磁器 近世陶磁器		中 世 屋 敷 の 一 角 を 調 査

木塚遺跡―第5次調査―
久留米市文化財調査報告書 第158集
平成11年10月31日

発行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3

編集 教育文化部 文化財保護課
印刷 株式会社 東 広